調査研究課題名：インターネットを利用した気管支ぜん息の有症率とその動向の把握に関する調査研究

個別研究課題名：小児喘息の有症率とその動向に関する研究

調査研究代表者氏名：赤　澤　晃

評価コメント
・小田嶋班の調査と同一地域でなされた調査であると理解しているが、両者の調査結果に大きな差が見られている理由が十分には理解できない。どちらの調査がより真実に近いのか立証する必要があるのではないか。 ・公害助成地区と非助成地区とを分けて解析してもらいたい。 ・紙媒体で行っている地区と比較するために九州地区を選定したのは頷けるが、次年度に小田嶋班が行う助成対象地域においても、同様のインターネット調査を行って、信頼性の検証をして欲しい。 ・1ヶ月後に行った調査で、季節変動の可能性が示唆され、次年度は毎月1回の調査を予定されているが、再現性を調査した時には1ヶ月後の調査で、ほぼ同じ結果が得られて再現性は良いと結論されているので、毎月1回の調査での変動を合理的に説明できるのか多少疑問が残る。 ・従来の疫学調査の限界を考慮し、将来を踏まえてインターネット調査の信頼性、有用性を検証する試みは評価される。すでに実績があるWEB調査の利点、問題点も参考になるが、対象地区を定めて、紙調査とWEB調査の結果を比較検討する試みは評価される。 ・ATS-DLDに基づく両調査の結果が乖離した場合、どのように解釈するかが問題である。 ・調査時期（季節）による有症率の変化は想定していたが、広域で情報が得られると、気象、感染症の流行、治療薬の使用状況などとの関連がより明らかになるので興味深い反面、どの地域で、どの時期に調査したかが重要になるだろう。また、喘息症状ではない気道症状を、回答者がどの様に認識できるかなど、区別が難しい側面も有している。 ・可能ならば、同じ母集団を対象として、WEB調査と通常のアンケート調査を実施し、その比較検討を行うことにより、WEB調査の利用価値と限界を出来るだけ明確にされたい。 ・WEB調査のデータは絶対的評価の面で問題があるにしても、相対的評価には堪えられる面があると考えられるので、相関分析や経年変化には使えるのではないか。 ・インターネットを調査媒体とする疫学調査は、利便性、反復性などで優れているが、回答者の選定が信頼性を担保できるか否かの検証が最重要課題である。本研究では、全国民の1％弱の会員を有するWEB管理機関を使ってデータを蓄積した。その信頼性に関する実証テストも調査用紙のデジタル化を含めて一応の満足すべきレベルにあると推測できる。 ・西日本地区での同様の調査用紙を使った調査との対比試験の結果は予備的解析では紙媒体から得られた喘息有症率よりは高値である印象があった。今後さらに詳細な地区ごとの対比検索が必要であろう。

・季節変動などを知るために複数回の調査を施行して経年的な調査結果が出ることを期待する。

・学童の在校背景を公立校だけではなく私立学校にも拡大することが、特に都市部では必要かもしれない。

・インターネット調査では、インターネットのリサーチ会員を対象にしているという事であるが、at randomに選択したのと違って、調査対象のサンプルに偏りが出てこないであろうか？インターネットによる調査の信頼性を検証するために、既存の調査方法も同時並行で行い、両者を比較してみることは重要である。

・今回の疫学調査の結果を今後実際の予防医学や治療にどのように還元させていくか、その具体的方法について明らかにすることが望ましい。

・紙ベースの調査の困難さを解消するための新しい手法をWEB調査によって研究を行っている。本法と従来の紙ベースでのATSやISAAC等の既存の方法を同時に行い、また、再現性等についても検討している。さらに季節変動調査を行うことができ、かつ、早く結果が出ることを大きな武器とし得る。一方で、調査母集団については、その性格が一般集団と同一でないことが問題として挙げられる。

・外国での同様の研究についても考察し、本研究の継続により新しいシステム構築が望まれる。